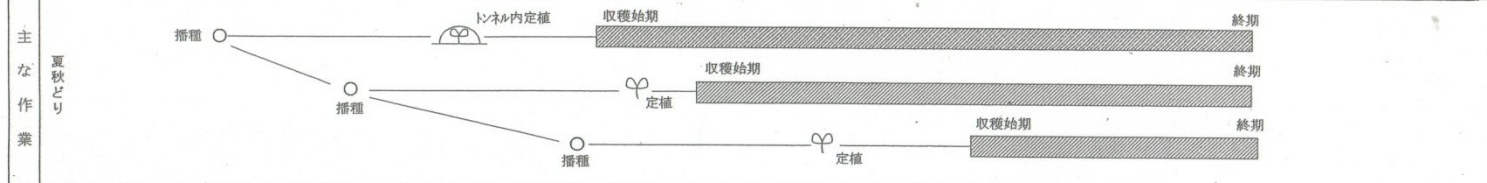


月	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下



1. 品種
 穂木 千両2号、式部
 台木 トルバム・ピガ一、赤なす、トナシム

2. 育苗
 発芽までの温度 日中30℃ 夜20℃の保温管理で発芽を揃える。
 発芽後は日中28℃夜15℃を目安に育苗する。
 温度管理 下表を目安に管理するが、接木を行う場合は日中25～28℃、夜20℃とし、接木活着後は徒長を防ぐため徐々に下げる。
 夏秋なす育苗温度の管理目標

育成ステージ	昼温℃	夜温℃
移植～活着	25	18
活着～定植10日前	25	16～18
定植まで	20～25	14～15

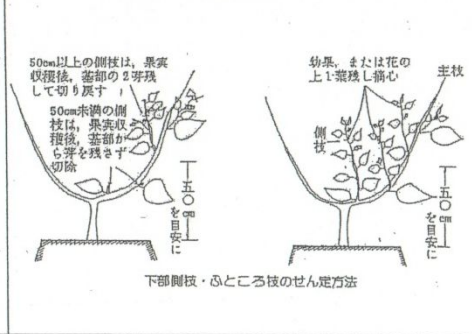
鉢上げ
 1. 移植は、本葉約2～3枚展開時が適期で、12～15cmのポリポットに移植する。
 2. なすは、栽培期間が長時間にわたるため、草勢維持と土壌病害(青枯病、半枯病、半身萎凋病等)対策が重要である。そのため、抵抗性台木を利用した接木栽培を導入すると良い。

育苗後半の管理
 定植 除々に灌水量を少なくして、定植予定日1週間前からは夕方少しおれる程度とし、夜温も無加温で馴化させる。
 一番花が咲いた時が適する。地温12～15℃を目標に、トンネル、マルチ等の準備を早めに行い、地温を上げておき晴天日に定植する。トンネル栽培は数日間密閉して活着を促す。

3. 施肥
 土づくり 堆きゅう肥 10a当たり3,000kg
 土壌診断をして、りん酸、塩基類などの養分状態を改善する。
 特になすは苦土欠乏が出やすいので、水酸化マグネシウム(水マグ)を10a当たり50～60kg施用することが望ましい。
 施肥量 10a当たり窒素30kg、りん酸20kg、加里30kgを基準とする。

施肥例 (10a当たり)
 ・基肥重点 BB苦土入りなす006 (10-10-6-苦土5) 300kg
 生育状況により、追肥を考慮する。
 ・有機質肥料主体 (基肥)BBマックス有機666 (6-6-6) 240～260kg
 (追肥)ベースト肥料・サスペンション1号 (10-10-10) 50kg×3回

4. 整枝・剪定の管理
 仕立て方法 良好な受光態勢で長期間、草勢と果実品質を維持できるV字4本仕立てを基本とする。V字支柱は3m間隔に設置し、マイカー線を4段に張る。
 整枝・剪定のねらい
 ①着果過多防止と草勢維持(前半期の着果ピークを乗り切る)
 ②着色不良防止・品質向上
 ③安値の8月の着果を抑え、9月以降の収量・品質向上
 整枝・剪定の方法
 ①下部側枝ふところ枝の整枝・剪定(7月～)
 ②下部不要枝の切除と古葉の除去(7月中旬～)
 ③側枝の摘芯・切り戻しの打ち切り(8月中下旬)



5. 病害虫防除
 (1) 特に土壌病害の防除には、高温期に青枯病や半枯病、低温期に半身萎凋病が発生しやすいので、抵抗性台木を利用する。
 (2) 夏期の高温を利用した太陽熱消毒を行う。(輪作時)
 (3) 褐色腐敗病や綿疫病は夏に降雨が多いと発生しやすいため、ほ場周辺に排水溝を設置するなど排水対策を実施する。台風後は予防散布を実施する。
 (4) アブラムシ類は、シルバーポリマルチやムシコンマルチを利用したり、シルバーテープを展張して飛来を回避する。
 (5) アザミウマ類は、ほ場周囲にソルゴーなどの障壁作物を栽培して飛来を防止し、シルバーポリマルチなどで発生を抑制する。
 (6) ハダニやチャノホコリダニは、高温・乾燥時に発生しやすいため、灌水をすると同時に発生を認めたら早めに防除する。

(平成19年5月現在)

対象病害虫	使用農薬名	適正使用基準
灰色かび病	グッター水和剤	1000～1500倍・前/5回
うどんこ病	フルビカフロアブル	2000～3000倍・前/4回
菌核病	ロブラル水和剤	1000倍・前/4回
褐色腐敗病	ランマンフロアブル	2000倍・前/4回
アブラムシ類	モスピラン水溶液	4000倍・前/3回
ハダニ類	コテツフロアブル	2000倍・前/2回
チャノホコリダニ	アフアーム乳剤	2000倍・前/2回
マメハモグリバエ	ダントツ水溶液	2000倍・前/3回
アザミウマ類	スピノエース顆粒水和剤	2500～6000倍・前/2回
コナジラミ類	スタークル粒剤	1g/株・定植時/1回

適正使用基準: 収穫前日数/使用回数